コラム：吉田公平先生
（東洋大学名誉教授）

なぜ中江藤樹は今でも心酔者に恵まれているのか

中江藤樹は第二啓蒙期（江戸時代）の初期の旗手であった。とはいえ、なにせ四百余年前の人である。この第二啓蒙期の江戸時代に活躍した人は数多く居る。研究者が学問的に興味を抱いて探求している人物は数多く居る。例えば大阪市の大塩事件研究会。しかし、いかに生きるかに関心を持つ人達が組織を作って持続的に学び続けられているのは中江藤樹だけである。

中江藤樹の誕生地・晩年の生活地である滋賀県の高島藤樹会。中江藤樹が陽明学に開眼した愛媛県の大洲藤樹会。中江藤樹の心学を最も熱心に長期に亘って学び続けた福島県の会津喜多方の藤の木会。中江藤樹は教祖ではない。学んでいる人々は信徒ではない。中江藤樹の遺著は聖書ではない。なのになぜ人々は中江藤樹の生き方考え方に魅了されるのか。不思議なことである。明治の作家である夏目漱石も心学者であった。彼が今日もなお広く読まれているのと似ている。漱石の作品の主人公は東京帝国大学の卒業生である。それでいて国が奨める立身出世主義を捨てて最愛の女性と結婚して社会の片隅でつつましく生活する。その葛藤を描いている。近代の市民主義を先取りした作品であった。今の読者はそこに共感を覚えるのである。中江藤樹の教えは、善なる本性を信じて自力をそれを実現発揮することを促している。彼の祈りは神に救済を願う祈りではない。そうではなくて、トコトン本性を発揮することに努力することを誓う、覚悟の祈りであった。救済者をあてにしない、また同調者を頼まない、一人信者の自力救済の信念である。とはいえ、中江藤樹は仲間に恵まれた。彼らは中江藤樹の言葉に励まされ、師の生き方を見て吾が身を省みた。喘息の持病に苦しみながらも、親身に教導する姿はあまりにも痛ましい。しかし、真摯な生き方、門弟に対する姿勢は一貫していた。中江藤樹の若い時の著作には既存の書物を素材にした編纂ものがあるが、中江藤樹の本領が発揮されていない。やはり、中江藤樹の豊かさは晩年にある。享年四十一歳は今日の長寿社会に比べるとあまりに早すぎる逝去であった。しかし、江戸時代の平均寿命は三十五歳くらいであったから、それよりもちょっと長生きしたことになる。しかし、やはり早すぎた。晩年の所得をしめす断簡が残されているが、今少しの年限に恵まれて、所謂「藤樹学」を熟成させて欲しかった。中江藤樹が仕残した「藤樹学」を熟成発展させたのは藤樹後学の人々である。それはいまは『中江藤樹心学派全集』（小山國三・吉田公平共編研文出版）に収録されている。是非ともお読みください。

吉田公平先生のご紹介

【経歴】
東北大学文学部・大学院　中国学専攻。九州大学助手、東北大学助教授、広島大学教授を歴任。東洋大学文学部教授、東洋大学名誉教授（現在に至る）。現在、東京で、「心の学び　吉田塾」を月一回開催。

【専門分野および研究テーマ】
中国哲学、日本思想史。最近は、江戸時代、明治・大正時代の心学・陽明学の研究が主題。

【所属学会】
日本中国学会、日本思想史学会、東北中国学会、白山中国学会、東洋古典学研究会

【主要著書・論文】
①『陸象山と王陽明』（研文出版）、②『陽明学が問いかけるもの』（同上）、③『日本における陽明学』（ぺりかん社）、④『中江藤樹心学派全集』（研文出版）、⑤『中江藤樹の心学と会津・喜多方』（同上）、他多数。

ひじりの声　上田　藤市郎

日本や世界の政治状況の変化について考えさせられることがある。

いくつかの独裁国家を除いて、市民の自由意志による選挙で代表が選出される国々では多数決の結果を尊重し、国政が委ねられる。数年後の行政の成果を反映して再度民意が表明されるのが民主主義の原則である。国民がどのように変化していくかは、その国の経済的社会的な課題に大きく左右される。

人間は、必ずしも性善説のみで行動するものではなく、と言うと藤樹先生を崇拝される諸兄には申し上げにくいのであるが、「衣食足りて則ち栄辱を知る」が示すように、人は日々の収入、仕事、健康、安全などが保障されてはじめて良知に致るわけである。常軌を逸した若者が高齢者を餌食にして悪行に走る事件を聞くと、我が国の政治が社会の課題を担い切れていない気がする。これは、教育や道徳で解決できる問題ではない。

豊かな心は、善行のお話を聞けば育つのではなく、多少とも、金銭的なゆとりのある生活によって育まれるのである。教育関係者よりも、政治にかかわる人々が、我が国の社会状況を一層深く洞察して、恵まれない人々の救済に力を傾注することが、明るい社会、我が国の未来を創ることになる。これは、非正規雇用者の数や賃金格差の課題を見ても明らかである。格差の少ない、経済的な基盤の安定が市民の良識を高めるのである。